



積極的な情報発信で 職員のTAC理解度アップ

『日本農業新聞』やJAの広報誌への投稿、JAのウェブサイトに掲載する「TACブログ」の更新など、これまでも外部にたいする積極的な情報発信を行ってきたJAグリーン近江のTACだが、今年度からはTAC活動への職員理解を促進しようと、TAC日報のJA内での公開を始めた。毎月の常勤役員とのミーティングも行い、TACの得た情報やノウハウをJA全体の財産として活用する方向を模索する。写真左から稲葉さん、成田課長、岩穴口さん



長期計画を共有し、 法人を次のステップへ

瓶割の郷ひらぎでは、17年に米の乾燥機3基と粉摺り機を導入し、玄米でJAに出荷する体制を整えた。「効果的な設備投資の結果、年々収益は拡大しています。課題は、同法人益につなげていくかです」と話すのは、同法人長の小澤清一郎さん(71)。TACと長期理事長の小澤清一郎さん(71)。TACと長期の経営計画を共有することが、スピーディーな提案と経営判断につながっている。

JAグリーン近江

滋賀県の南東部に位置し、自然環境に配慮して生産される「環境こだわり農産物」の認証を受けた「みずかがみ」や良食味品種「コシヒカリ」などのブランド米のほか、酒米や近江牛の生産が盛ん。営農振興課TAC8人、特産課TAC3人が約600戸の担い手を訪問している。TACパワーアップ大会2016で「Top Runner JA」として表彰された。

担い手もTACも 次のステージへ!

イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」



TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで
(<https://www.zennoh.or.jp/tac/index.html>)
JA全農TACフェイスブックページ
(<https://www.facebook.com/tac.team.for.agricultural.coordination/>)

JA全体に広げる思い

一方で、大規模水田経営の対応を専門とする営農振興課のTAC・稲葉津希さんは、地下水制御システム「FOEAS」(※)を同法人に提案。「法人化して大区画になった圃場の問題をヒアリングすると、全農滋賀県本部が提案するシステムの実証実験の条件に合致することがわかり、タ

市場で高値がついただけでなく、JAの直売所での販売で消費者からの高い評価を直接耳にできたことが、メンバーの意欲を向上させている。

「当法人はグループの結束が強くなり、それが効率的な作業につながり、農産物の品質向上に貢献してきました。先進的な産地や販売現場の視察も行い、高いモチベーションで栽培に取り組みられています」

の栽培を一手に担う。この提案をしたのが、JAグリーン近江特産課のTAC・岩穴口博美さん。園芸品目導入を担当し、法人経営の多角化に欠かせない存在だ。

イミングよく導入することができました。システムの管理はもちろん、収量アップや販売先の確保まで、長い目でサポートしていきます」

法人化はあくまでもスタートライン。さらなるステップアップには、多角的な視点からの、経営改善策が求められる。その点で、特産課と営農振興課、それぞれのTACが専門性を高めつつ、連携してよりよい提案とサポートをする仕組みは大きな強みだ。

TACの育成に当たる特産課長の成田義幸さんは、今後の展望を次のように話す。

「法人化や新事業の展開には、不安がつきものです。担い手はJA職員にたいして、なんでも話せる対等な関係を求めています。TACが蓄積したノウハウをJA全体で共有し、農家・地域住民と共に農業を盛り上げることが、ほんもののTAC活動です」

この一〇年で育ったTACは約二六人。現在は支店などで活躍する彼らが、その思いを確実につないでいる。

同じ目標を見据え、 共に歩むTAC活動

—— 滋賀県 JAグリーン近江 ——

今年度で11年めを迎えたTAC(地域農業の担い手に出向くJA担当者)の活動。地域農業を持続可能なものにするために、長期的な視点に立った担い手の支援が求められています。この10年で培ってきたノウハウで、担い手のさらなるレベルアップ、そしてJA全体での活動へと発展させようとしているJAグリーン近江の活動を紹介します。

阪本博文=写真 photo by Hakubun Sakamoto JA全農TAC推進課=企画協力

TAC
10周年
その先の未来へ

ii!!
TAC



瓶割の郷ひらぎは、理事5人、役員13人を中心に、毎月開催する理事会で経営方針を決定。ストック栽培を始めたことで、若いメンバーが増えた

二〇〇八年に始まったJAグリーン近江のTAC活動。その柱の一つが、集落営農の法人化とその後の経営安定化・拡大の支援だ。

まずはTACが中心となり、滋賀県の普及指導員や市町の担当者やチームをつくる。集落での話し合いと課題解決により、これまでに一二九の農事組合法人を設立した。

一年に法人化した農事組合法人瓶割の郷ひらぎ(東近江市)もその一つ。米・麦・大豆を中心に、キャベツ、カボチャなど多品目の野菜を生産する。成熟期を迎えた同法人が一七年に着手したのが、女性組織の結成とストックの栽培だ。

「五月に育苗が終わると、翌年度までハウスが空いてしまうから、活用できないかと思っていました。それをTACに話すと、勧めてくれたのが、八月三月の花弁栽培でした」

そう話すのは、同法人内で野菜生産を担当する女性グループ「オリブ」のリーダー・村井さきさん(68)。グループには、二七人の女性が属し、ストック